

行き場を見失った子どもたちと

訪問型フリースクール「漂流教室」(札幌市)

古びた木造廊下から暖簾を分けて足を踏み入れると、そこは畳敷きの大広間。20畳ほどある。

壁ぎわの書棚に漫画本がぎっしり並び、ギターが3丁。パソコンもある。

子どもたちが寝転んだり、パソコンに向かったり。小さなテーブルに、お煎餅や飴。郷愁をそそるような懐かしみのある、不思議な空間が広がっている。

訪問型フリースクール「漂流教室」。札幌市中央区南8条西2丁目、旧豊水小学校3階「市民活動スペース アウ・クル」にあって、ともに30代の山田大樹さんと相馬契太さんが運営にあたっている。

主な活動内容は、小学生から高校生ぐらの世代を対象に、家庭訪問して話し合ったり、学習支援をする。不登校に限定せず、相談などの求めに応じている。

固定の教室がなく、それぞれの訪問先が「教室」という考え方から「漂流教室」と称している。

■ メンタルフレンドという考え方

未来社会に放りだされた子どもたちが試練を乗り越え生き抜いていく、^{うめず}榎岡かずお氏の人気漫画「漂流教室」も意識、榎岡氏と出版社の許可も得て命名した。

「在宅学習支援コース」「通信制サポートコース」「メンタルフレンドコース」などがある。週1、2回。保護者に実費を負担してもらう。

料金は月額で在宅学習支援コース2万5千円(1回2時間で、週2回)、通信制サポートコース1万5千円(週1回)、メンタルフレンドコース8千円(1回1時間で、週1回)に設定している。



漫画本がギッシリの書架

北海道共同募金会の義援金、(財)北海道地域活動振興協会の助成金を受けている。行政の資金援助はいまのところない。

保護者からの料金収入は運営維持経費と、山田さん、相馬さんの生活費に充てられ、かろうじて「教室」が存続している状況だ。

メンタルフレンドというのは「ちょっと悩んだとき困ったとき、一緒に考えたりします。ちょっと嬉しかったとき楽しかったとき、一緒に喜んだりします。ちょっと天気がいい日には、一緒に遊びに出たりします。そういう関係を『メンタルフレンド』といいます。私たちは、これをなにより大事にしたいと考えています。(「漂流教室」ホームページ)。



大広間の片隅にはギターも

山田さんが言う。「不登校って、何だろう。学校、あるいは職場復帰が最終的な目標なんだろうか。そうではありません。たとえ通学していても、学校に、あるいは社会に適応できずにいる子どももいるんです」。

運動に賛同した大学生ら 50 人が、家庭訪問を引き受けている。訪問を受ける側の子どもたちも、数十人。学校の友だちや教師、父母とも違う、新たな関係が刺激となり、子どもたちは身の回りの「社会」環境とコミュニケーションできる力を養っていく。

■ 子どもたちに生き抜く力を

時間がかかる。根気の要る作業でもある。

山田さんと相馬さんが「漂流教室」を始めたのは、2002 年から。山田さんは学習塾の講師、相馬さんにはフリースクールのボランティア経験があった。

大学同期の 2 人には素朴な疑問があった。「塾やフリースクールに来ているのは、ごく少数。来ていない子どもたちは、どうしているんだろう」。

試行錯誤の末、辿りついたのがこの「教室」だった。最初の 4 年間は事務所がなかった。旧豊水小学校三階に入居したのは 2006 年から。豊水小学校が 2 年前の 2004 年、廃校となり、札幌市役所が「市民活動を中心としたまちづくり活動の場」とした。

『漂流教室』は大海原を漂流する者の羅針盤にはなりません、子どもたちに生き

抜く気力を出してもらおうと思います。『漂流教室』は農夫のように役に立つものを求めはせず、学校とは違う土となり子どもたちが育つ基盤を作るように活動します。(中略) 不登校であっても登校していても、子どもたちは既に現代社会を漂流しています。ならば、私たちも共に漂流しようと思うのです」。

「設立の辞」に、思いがこもっている。

■ くつろぎと癒しの空間

畳敷きの部屋は、学習をする場ではない。山田、相馬さんやボランティアらの事務所であり、同時に子どもたちの拠りどころだ。

不登校の子どもたちばかりでなく、帰校してからやってくる子どもたちもいる。「漂流教室」から旅立って進学、就職した少年、青年たちがぶらりと立ち寄ったりもする。それぞれが勝手気ままに、自分の時間を過ごしている。

カラオケ大会、卓球大会、クリスマス会など、子どもたち主体の行事がいくつもある。毎週金曜日は参加フリーの「宴会」。台所設備を備え、昼食づくりもする。子どもたちが「そんなことぐらいならできるよ」などと簡単な炒め物づくりに挑戦する姿がある。

畳敷きの大広間は「家にいるだけの毎日に飽きた人に、何か出会いがあるといいな、と思っている人に、外出訓練をしたい人に、

学校ではないけれど、学校のように毎日行ける場所が欲しい人に」開放されている。

「疲弊している子どもに、落ち着いて過ごせるところまで自ら足を運び、子どもたちが安心して話せる状態をつくりたい」。山田さんらの思いを実現させた、くつろぎと癒しの空間なのである。毎週金曜日の午後2時からの2時間、「アウ・クル」の体育館を借りて、みんなで遊ぶ場も確保した。運動したり、楽器で大音響出すのも自由だ。

ここでは特別なカリキュラムはない。何をしても、しなくてもOK。話がしたければ、山田さんや相馬さんがお相手をする。勉強がしたければ、手伝いもする。

外の世界に関心を持たせるため一つだけ「注文」があって、生徒らにその日にしたことや買い物したレシートをためたり、気になった新聞記事を投げ入れたりするよう勧めている。また月に1、2度イベントがある。

漂流教室のホームページには子どもたちや父母世代まで、メールで交流する欄もあって、率直な体験談なども綴られている。現代社会に「漂流」する人々の胸中の一端に触れ、ともに考えていく貴重な「場」ともなっている。



くつろぎの空間。二十畳

■ 保護者たちの交流

一方で、山田さんたちは学校、父母との話し合いも大事にしている。保護者同士が心を開いて語り合う「保護者懇談会」を、年3回、開いている。山田、相馬さんはあえて、席を外す。

「子どもたちが変わるだけでは。子どもたちを取り巻く環境も変らなくてはなりません。子どもたちの存在を認めていく。子どもたち、家庭、学校の三者が背負う荷を、ボクらも担っていく。そうすることによって、子どもたちのエネルギータンクをつくらせていきたい」と。父母もまた、何かを学んでいるのである。

漂流教室は「不登校の子どもに学校と同じような教育をする」単なる家庭教師ではないが、ここで学ぶ日数・時間も正式な出席

日数として認められるよう、運動を展開していく。

いま、不登校の児童・生徒子どもたちは札幌市内だけで千数百人といわれる。道内だと、数千人に上る。様々な施設やフリースクールに通うのは、ほんの一握り。それだけに訪問型フリースクールの存在は貴重だ。

山田さんたちは最近、大学の講義に講師として招かれたり、市民活動、まちづくり活動などに参加する機会が増えてきた。日本フリースクール大会、不登校を考える全国大会、ひきこもり支援者全国実践交流会、全国青少年相談研究集会といった全国大会にも参加した。

「行き場を見失った子どもたち」を考える場が、じわじわと広がってきた。父母の世代の大人が考え、方策を見出していく機会に、と。

■ 連絡先

〒064-0808 札幌市中央区南8条西2丁目

市民活動「アウ・クル」内

訪問型フリースクール「漂流教室」

TEL/FAX : 050-3544-6448

Email : hyouryu@utopia.ocn.ne.jp

URL : <http://www16.ocn.ne.jp/~hyouryu/>

(在室...火~金 9:00~20:00)